

役割語を取り入れた日本語教育の意義とは

— 日本語上級クラスでの実践を通して —

朴 智淑・増田 恭子・山本 裕子

昨今の言語教育では、標準化を助長することに関する問題が議論されている (Doerr 2009 : 29) が、一方で言語の標準化や階層化を促すのではなく、流動的で多様なものとして捉えるためには、どのような活動や課題が有効か等については十分に報告されていない。

「役割語」をテーマにした理由としては、登場人物の一助になる役割語が時には偏見や差別意識の助長につながりかねない (金水 2003 : 203) こと等が挙げられる。また、役割語は学習者の興味関心をひくものの、体系的な教育がなされているわけではない。さらに、現実社会で使われていることばとのズレがあることも多く、アニメ・マンガを通して学んだことばをそのまま使用し、問題が生じることもある (宿利 2018 : 233)。

本発表では、カナダ・アメリカの大学の上級日本語クラス活動とその後行ったプロジェクト活動の実践と内容について報告する。まず学習者は 1) 役割語を学び、2) マンガ『ヤンキー君と白杖ガール』(2019) (以下、『ヤンキー君』) と『ホリミヤ』(2013) を読み、セリフやキャラクタとの関係、使われている表現の果たしている役割や作者の意図、位相語との違いについて考察し、3) 翻訳での役割語事例について批判的に考察・分析した。さらにその後のプロジェクトでは、それぞれの学生がマンガ・小説・CM などから自分が興味をもった役割語の使用例を探し、トピックを決めて分析し、その結果をまとめ発表した。表 1 に授業とプロジェクトの内容と手順をまとめる。

表1 授業内容とプロジェクトの手順

| 授業内容と手順 | | 課題内容 |
|-------------|---|---|
| 1 | 役割語とは：典型的な役割語の紹介 | 『ヤンキー君』を読む |
| 2 | 『ヤンキー君』を題材に、セリフのマッチング、セリフやキャラクタの関係について考える | 『ヤンキー君』の役割語の振り返り 『ホリミヤ』を読む |
| 3 | 『ホリミヤ』を題材に (同) | 『ホリミヤ』の役割語の振り返り |
| 4 | 翻訳での事例の紹介、役割語の役割について考える | 振り返り1 (役割語の役割、学習の必要性について考える) |
| 5 | 提示されたストーリーに合わせて、キャラクタとそれに合ったセリフを考える | 振り返り2 (同) |
| プロジェクト内容と手順 | | |
| 1 | トピック選択 | 漫画・アニメ・小説・CMなどの役割語が使用されている例から強く興味、関心がある内容をトピックに選ぶ |
| 2 | 情報収集 | 新聞記事・選んだトピックに関する文献など各自で情報収集する |
| 3 | 情報分析 | 情報を分析し自分の意見や考えをまとめてレポートを提出する |
| 4 | 作品作成 | 何をどう伝えたいかを考え、スライドを作成する (発表5分程度) |
| 5 | クラス発表・ディスカッション | クラスで発表後発表の内容についてディスカッションする |

本発表では、役割語のジェンダーに関わる表現を批判的に考察した学生のプロジェクトを3つ分析し報告する。一つ目のプロジェクトは、人称代名詞に注目し、リアリティー番組等にみられた例を分析した。他人の選択する人称代名詞を自らの視点で捉え直すことで、教科書などで取り上げられている規範の枠を超え、自己表現の手段として捉える契機となったこと、さらに自分も主体的に関わるものであるという意識が見られた。

二つ目のプロジェクトは、翻訳における役割語をテーマに取り上げ、ノンバイナリーであることを公言している歌手の日本語に訳された2つのインタビューを比較した。1つはいわゆる「女性的」な表現を使って翻訳されており、1つは「女性的」な表現が少ない翻訳だった。翻訳過程でバイアスや決めつけが引き起こす可能性のある問題についての考察が見られた。

三つ目のプロジェクトは、自称詞として漫画の女性キャラが「僕」や「自分」を使うことに注目し、現実とは異なる「役割語」の表現効果を確認した上で、COIL授業で接した日本人学生に一人称の使い方についてインタビュー

役割語を取り入れた日本語教育の意義とは（朴 智淑・増田 恭子・山本 裕子）

を実施した。結果を発表することで、性別を問う・問わない代名詞の違いや文化的・歴史的な違いへの気づきが得られた。また、この発表を聞いたノンバイナリーの学生からは多くの学びがあったというコメントがあった。

以上、これらの例からも分かるように、教科書や規範とされるジェンダーに関する表現の枠を超え、役割語を通してメディア等で実際に使われていることばを批判的に分析している様子が見られた。「役割語」を様々な角度から批判的に考察することの意義として、自分の使うことばや翻訳の際の細かな配慮について捉え直す機会になったことが挙げられる。

今後さらに多くの実践を推進しながら、「役割語」を日本語教育に取り入れる意義や方法の探究を進めたい。

【引用文献】

Doerr, Neriko Musha (ed.) (2009) *The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects*, Mouton de Gruyter, Berlin.

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。

宿利由希子 (2018) 「日本語教育とキャラ」 224-241. 定延利之 (編) 『キャラ概念の広がり
と深まりに向けて』三省堂。

(ばく じすく・トロント大学 Assistant Professor)

(ますだ きょうこ・ジョージア工科大学 Professor)

(やまもと ひろこ・愛知淑徳大学教授)